

「日本のエネルギーを日本と海外の新聞の比較から考える。」

三重大学教育学部附属中学校 教諭 大村 政茂 (国語科)
教諭 中垣 尚子 (英語科)

I 研究の動機とねらい

昨年度のエネルギー環境教育教育実践研究において、日本国内の新聞の比較から、根拠となるデータの取り上げ方の意図を読み取り、その論理の妥当性について検討し、エネルギーのあり方について考えるという授業を発表した。その際、三重大学の朴恵淑氏から「海外の新聞がどう取り上げているかも見てほしい」という意見をいただいた。

そこで、本年度は今まで取り組んできたクリティカル・リーディングに加え、アメリカのワシントンポスト紙が日本のエネルギー、とりわけ電力と環境についてどのように論じているかを比較して読み、英語との教科横断・領域横断による学力形成を狙おうと考えた。

II 実践の概要

- 1, 使用題材 温暖化対策の新合意 危機感共有の第一歩だ (朝日新聞社説 2015年12月15日)
パリ協定に関して評論家が気候変動行動を無意味だというのは根拠がない。(ワシントンポスト 2015.12.12)

PISA2015 において、数学リテラシーと科学的リテラシーについては過去最高の結果であり、国際的に見ると引き続き平均得点が高いグループに位置している。しかし、読解力は前回 2012 年の調査の 4 位から 8 位へと後退した。そこでの課題を、文部科学省は「PISA 読解力の向上に向けた対応策について」の中で、以下のように分析をしている。

- 「従来から見られた「自分の考えを説明すること」などに課題がある。(解答を課題文中から探そうとしているなどの誤答)
- 過去の結果と比べて正答率に大きな変化があった設問の誤答状況を分析すると、
 - ・ 複数の課題文の位置付け、構成や内容を理解しながら解答することができていない
 - ・ コンピュータ上の複数の画面から情報を取り出して整理し、それぞれの関係を考察しながら解答することができていない

全国学力・学習状況調査においても、根拠が大切であることはわかっているが、根拠をもとに自分の考えを述べることに弱さがあると言われており、未だに「論理的思考」や、それを基にした「表現力」に課題があることがわかる。

さらに、国語の授業では教科書に載っている一つの文章を精読するというタイプのものが一般的である。それが不要であるというわけではないが、これだけでは上に挙げた「複数の課題文の位置づけ、構成や内容を理解しながら解答すること」「複数の画面から情報を取り出して整理し、それぞれの関係を考察しながら解答すること」といった課題に対応することができない。

これらに対応するためには、普段から比べ読みや重ね読みといったことを授業に組み入れていく必要がある。その中で、「論理的思考」や、PISA で言うところの「探求・取り出し」「統合・解釈」「熟考・評価」という視点、そしてそれらを元に自分の考えを表現できることを、学習活動の中に意図的に組み入れていく必要があると考える。

また、今回英語科との教科横断型の授業を構想し、ワシントンポストと日本の新聞の比べ読みをしたことにも意図がある。

国によって同じ事に対しても見方や考え方が違うということはもちろんであるが、日本語と英語の違い、文化の違いからくる、論理の違いがあるからである。日本語はどちらかというと文脈依存の言語であり、言わなくても察するということが求められるという特徴がある。(京都では特にそれが強く、近所の人には「お宅のワンちゃん、元気がよろしいなあ」と言われたら「犬が鳴いてうるさい」という意味なのだそうである。これなどは察する文化の最たるものであろう) それに対して、英語は主語が明確であり、指示語が何を指しているのか、初めて出てきた話題なのか、前に出た話題なのか、主張なのか、反論なのかなどの構造がはっきりしている。ここには多くの民族と意思疎通をする必要がある文化の違いがある。文化の違う人には「察する」ということを期待することができない。英語は誤解のないように、明確な論理をもって考えを伝えるということが必要な文化を背景に持っている。

授業で用いるのは日本語訳をしたものではあるが、論理をとらえることで、言語や文化の違いまで捉えることができれば、そうした英語の本質に触れることができたり、英語教育で重要な「多文化理解」という領域にも触れたりすることができるものと考えられる。

領域横断ということ言えば、COP21 を題材にしたことにも意味がある。言うまでもなく、エネルギーや環境の問題は1国だけでどうにかできるレベルではない。国際的な協議によって同意された枠組みで解決に近づいていくべきものである。そこで、日本だけではなく、アメリカではどのように COP21 を捉えているのかを知ることは、環境問題をよりグローバルに見ることができるときっかけになると考える。

英語教育を論理という観点で見ると、英語の教科書の文章は短い英文の中にも主張、根拠が組み込んであり、英語が論理的に構成されていることがわかる。こうした構造に着目した取組は今までにあまりなかったのではないだろうか。これからは、国際的な人材を育てるためにも文法だけでなく、このような構成にも焦点を当てて授業に取り組めるようにしたい。それにより英語の文章に日本語とは違うロジックがあるのを知ること、日本語の感覚で英語に直しただけの英語ではなく、よりネイティブに近い英語に近づいていけるものとする。

2. 授業の流れ

【英語科】

第1時 英字新聞を読んでみる（簡単な新聞記事を読む）内容についてクイズをする

第2時 読売新聞のパリ協定の記事を読む

第3時 ワシントンポストの要約の記事を訳す

第4時 要約の訳を確認する

ワシントンポストの記事をしてみる

ワシントンポストの記事の訳を読む

第1時では、普段の教科書とは違った英語に触れる機会とした。分からない単語も文脈などから意味を推測し、読み進める練習をした。記事は高校生のトライアスロン大会開催の記事であるが、写真の添付があり、スポーツということで生徒にも馴染みのある内容を用いて、取り組みやすい記事にした。英語では主語や動詞をほとんど省略せずに明記しているため、文構造が分かれば読み取りやすくなることも考えられる。内容に関する簡単な英語のクイズを行い、読み取りの練習をした。答える際は必ず単語ではなく、文で答えさせ、主語と動詞を意識させた。

第2時では、パリ協定を題材とした英字新聞を読む準備として、まず読売新聞のパリ協定の記事を読んだ。そして、日本語で内容を把握することにした。日本語でも語彙や内容が難しく、理解に苦しそうな生徒もいた。そんな中で、ワシントンポストという英字新聞を読んでいくには単語も難しく、習っていない文法も多いため、要約を使用した。まず、文の構造を確認するために主語と動詞に線を引かせた。教科書よりも難しい構造になっているため、主語と動詞の間に多くの修飾語が入っていたり、節が入っていたりすることも多く、戸惑っている生徒も多かった。

第3時では、要約を使った読解をした。一人では大変なため、グループで協力しながら取り組むことにした。英語では主語や動詞をほとんど省略せずに明記される特徴のおかげで、代名詞が何を指しているかを追っていくことができれば、単語や文法は難しいものの、単語の意味を調べながら、それらを集めて繋ぎながら何とか日本語にしていた。

生徒は1、2学期の間にスピーチやプレゼンテーションに取り組んだ。それらの作り方を学習した時に opening, body, closing の構成は学習済みである。中には構成の点にも気づいた生徒もいたようであるが、ほとんどの生徒は訳すのに必死で構造に気づくところまではいかなかった。授業時間内に終わらなかった分は宿題とした。難しい単語も多かったため、自宅のインターネットの翻訳機能や辞書を使って自力で3時間くらいかけて訳した生徒もいた。はっきりと英語と日本語との文構造の違いに意識が行くことは難しいと思うが、訳す作業の中で英語と日本語を組み立てる時の配置の違いなどを何となく感じているのではないかと感じた。

第4時では、それぞれのグループの訳を発表した。苦戦しながらも多くの生徒が正解に近い訳ができていた。要約の英文でも生徒にはかなり難しい内容だったので、ワシントンポストの記事は読み込むのではなく、元の記事はこれだということを示すに留まった。いくつかのキーワードは要約でもでてきたため、大まかな内容は理解できていたように思う。また、英語が好きな生徒は興味を持ってチャレンジしている姿が見られた。その後、ワシントンポストの記事の訳を配付し、各自で読んだ。

【国語科】

英語科の取組が終わった後から取組を始めた。まず、ワークシートを用いて、論理的に読むことをトレーニングした。

三角ロジックは附属小学校でも指導されており、附属小学校出身の生徒にはなじみのあるものである。受験で入学した生徒は附属中に入ってはじめて目にするものである。よって、中学校に入学した早い段階で三角ロジックについては指導し、「読むこと」を中心に、「書くこと」においても用いるようにしてきている。しかし、最初はトレーニング的な活動をしておくほうが、レディネスを整えられると考えた。

〈ワークシートの問題例〉

① 主張 マックよりもウインドウズのほうがよいと思います。

根拠 世界のパソコンユーザーの圧倒的多数がウィンドウズを使っています。

- ② 主張 少年犯罪にも厳罰を与えるべきです。
根拠 現在、少年犯罪は増えて、凶悪化も進んでいます。
- ③ 主張 後部座席でもシートベルトを義務付けるべきです。
根拠 毎年毎年約四千人が交通事故で命を落としています。

これらの文章の論拠（理由づけ）を考え、主張に対する反論も考えるということに取り組みさせた。その後、「朝日新聞 社説 温暖化防止 子孫につけを残すまい（2014年1月9日）」を用いて、主張と根拠の関係について読み取らせた。以下に、授業の流れを示す。

- 第1時 音読して、主張を探す。
第2時 根拠を探し、主張と根拠の関係を捉える。
第3時 第13段落から第15段落が書かれた意図を考える。

生徒は、第4段落に主張があるのだが、その根拠が第1～3段落、そして第5・6段落であり、再度主張を言い換えて繰り返す形で第7段落があることや、第12段落の根拠が第8～11段落であることを読み取った。その中で、第4段落を挟んで根拠があることについて、生徒からは「この形でいいんやろか」と、論理的に構成されていない段落構造に疑問の声がでた。

このように主張と根拠の関係を捉えていくと、第13～15段落には主張のみがされており、ここはないほうがよいのではないかという意見が出たので、それについて検討させた。

生徒からは、「具体案を出す必要があったから、訴えるような形で具体案を出した」「」といった意見が出された。論理的かどうかということ判断するには、主張に対する根拠と論拠、そしてそれぞれのつながりが妥当であるかを検討するのが基本であるが、この第13～15段落のように、レトリックとして考えた方がよい場合もある。特に日本語は文脈依存性が高く、「言わなくてもわかりますよね」という書き方がされる。読み手としては、それを理解した上で、論理的に読むことを中心に、それにあてはまらない部分においては、どうしてこういう書き方がされているのかという、書き手の読み手に対する意識と、その表現としてのレトリックを捉えることで、文章全体の読み手への意図が見えてくるものと考えた。

こうした学習を踏まえて、COP21 パリ協定に関する朝日新聞の社説とワシントンポストの記事の比べ読みに取り組んだ。両紙を同時に読んで比較するのは内容的に難しいと判断したので、朝日新聞の社説から学習を始めた。

前回と同じように、主張を探し、それに対する根拠を探すという手順を進めた。主張に線を引かせると、最後の意味段落が線だらけになり、主張のほとんどが後三分の一に集まっていることに生徒は気づいた。そこで、前半三分の二の、書き手の意図は何かについて考えさせた。

生徒からは「読み手に情報を与える」「新聞の役割として、まず事実を報告している」「後半の主張をするために、パリ合意についてわかってもらおうとしている」といった意見が出された。

次に、後半に主張が並べて書いてあることの、筆者の意図について考えさせた。まず主張の部分を読み、印象を訪ねると、生徒は「押しつけられているような感じ」「強引な感じ」「」というような印象を持っていた。そこで、「主張のみだと反論がしづらい。主張に対する反論は水掛け論にしかならない」ということと、「根拠や論拠を言わないのは、当然知っている事である場合と、根拠に弱さがあるためにあえて隠している場合がある」ということを教えた。また、読み手として、どうして根拠が書かれていないのかということにも気をつけて読めるとよいということも伝えた。

そして、「ワシントンポスト」の記事を検討した。全文の現代語訳を英語科でもしてもらい、それを縦書きにしたものを用いた。これまで同様、主張に線を引くことから始めた。すると、生徒は「全体に線を引いたところがあるなあ」と、すぐに文章の構造の違いに気づいていた。そこで、「前に勉強した朝日新聞の社説と比べて、何か気づくことはないか」と問うたところ、「朝日新聞は後に主張が集まっているけど、ワシントンポストは全体に主張がちらばっている」「どの段落にも主張がある」という気づきが出された。そこで、英語の特徴として、原則的に一つの主張で一つの段落を作るということも伝えた。

そして、主張に対する根拠は何かを検討させた。一通り検討させたところで、朝日新聞と比較して、「類似点」と、「相違点」についてグループで話し合せて、挙げるように指示した。以下、生徒の気づいたことである。

【類似点】

- ・パリ協定が話題になっている。 ・主張が最後にある。 ・先進国としての視点で書かれている。
- ・読み手が当然わかっていることは省略される。 ・国民性が出ている（アメリカ＝自国がすばらしい。日本＝自国はダメだ。） ・気候変動を試練と捉えている。 ・温暖化対策について書いている。
- ・自国に対してどうすべきかを書いている。 ・パリ協定により評価をしている

【相違点】

〈朝日新聞〉	〈ワシントンポスト〉
<ul style="list-style-type: none"> ・国民みんなで取り組もう ・1.5度以内を理想にすることを取り上げている ・小見出しを使ってまとめている ・日本と他国が協力していこう・欧米に遅れるな ・段落が多い（23段落） ・根拠のない主張がある ・主張が最後にかたまっている ・他国を批判していない ・謙虚な書き方 ・言いたいことは最後 ・比喩をよく使う ・話題が多く、一つ一つの内容が浅い ・同じ話題でも段落を分ける ・主張かそうでないのかが、文末からはわかりにくい ・国民一人一人が変わろう 	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカが先導していこう ・取り上げていない ・小見出しを使っていない ・アメリカが主導していこう ・段落が少ない（7段落） ・どの主張にも根拠がある ・主張が各段落にある ・中国などの途上国を批判している ・「上から」書いているような印象 ・言いたいことが最初 ・比喩がなく、事実と意見だけで書いている ・一つの内容を深く書いている ・同じ話題では段落を分けない ・「推論」「断定」が使い分けられていてどれが主張かわかりやすい。 ・アメリカ合衆国が変わろう（温暖化防止を先導）

この気づきをもとに、「日本語の文章の特徴にはどのようなものがあるか」という課題について考えさせた。以下は生徒の意見である。

- ・主張と根拠のつながりがわかりにくく、主張の文かどうかもわかりづらい。
- ・主張だけで伝えようとしている。
- ・はっきりと断定せず、あいまいな表現。逃げ道のある、まわりくどい書き方。
- ・言いたいことをスパッとせず、遠慮した感じの書き方。おだやかに述べている。
- ・小見出しで意味段落を分けている。
- ・主語の省略が多い。
- ・最後に主張をもってくる。

これらは英語の文章とは逆の特徴であると言える。つまり、英語の主張の文は見ればわかるくらいははっきりしており、主張の根拠もはっきりしている。どうとでもとれるような曖昧な言い回しをせず、明確であることが大切にされている。主張をはっきりさせるために、一つの主張と根拠（と論拠）で段落を作る。そして段落それぞれが大きな主張を支える柱になっており、全体的な主張は最初に書いてあるということである。

こうしたことも口頭で確認しながら、最後に、「日本は『察する文化』があり、『全部言わない』というのがよいとされるところがある。これはこれで日本の美しい文化であるので、大切にしてほしい。しかし、それだけではこれからのグローバルな社会ではやっていけないところがある。日本的なやりとりでは話が通じず、論理的に話したり、聞いたり、読んだり、書いたりすることが必要な場面が出てくる。日本人の『察する』ということも大切にしながら、必要な場面では論理的な思考を働かせることができるようになっていこう」と伝え、授業を終えた。

III 考察

【国語科】

〈成果〉

- ①論理性をものさしにして、英語の文章と日本語の文章の違いを比べ、言語の特徴を捉えていくということについて、生徒に一定の理解をもたせることができた。
- ②三角ロジックについては習熟してきた様子がある。主張と根拠を捉えることはほとんどの生徒ができるようになった。さらに文章全体の構造を捉えるということにつなげて、文章全体としての論理性を検討できるように指導していきたい。
- ③英語科の教員も論理について考えるきっかけとなり、教科指導上の知識の幅が広がった。

〈課題〉

- ①「主張」「主張に対する根拠」「根拠が省略されていることの意図」「段落相互のつながり」「論の妥当性の検討」といった「読むこと」に関する知識・技能については授業中に明示化していくことで生徒が何を学んでいるのかをメタに捉えられるようにしたが、「比較」「具体と抽象（帰納的思考）」については明示しなかった。生徒の学びを深めていくためには生徒が「何をどうやって学んだか」をメタに捉えられる必要があるため、振り返りも含めて考えていきたい。
- ②日本語の文章の特徴はつかめたので、曖昧な表現を含んだ日本語の文章を批評したり、書き直したりす

る取組や、曖昧な日本語の表現だからこそよいものについても今後取り上げていきたい。

- ③「パリ協定」を題材としては用いたが、それについての突っ込んだ話はしていないため、あくまでも「文章表現についての学習になった。題材の内容についても学べるような仕掛けを考えたい。
- ④ワシントンポストの元の文章が難しく、中学生に訳させることに非常に手間取った。教科を横断して、生徒に何を理解させたいのかということについてはもっと精査して授業を行う必要がある。

【英語科】

英語の文構造と日本語との構造の違いについては英語力の高い生徒については気づけていたが、全員が日本語との文構造の違いに気づく域に達するのは難しかった。日本語に訳すという作業を介さず、直接、英語を見て、そのまま英語で理解する力があれば、この取り組みのテーマである言語の構造の違いに気が付かせることができたかもしれない。日本語を介さずに英文から直に感じ取れるようになるまでにはまだ練習と学習が必要だと痛感したが、いい試みができたと感じる。

今回は、内容が難しく、日本語でも理解に苦しむ場面が多かったため、主張や根拠など、内容については国語で勉強するとして、英語では英語の構造に焦点を当てて進めた。残念ながら構成について深めるまでには達しなかったが、教科書とは違う生の英語や記事に触れる機会となり、内容も難しいのでジャンプの課題に取り組む機会にもなってよかった。

参考文献

- ・小野田博一、論理思考力を鍛える本、日本実業出版社、2002年8月20日
- ・マーティンH. レビンソン、GS思考法、文教大学出版事業部、2011年10月15日
- ・福沢一吉、論理的に読む技術、サイエンス・アイ新書、2012年12月25日
- ・横山雅彦、高校生のための論理思考トレーニング、ちくま書房、2006年6月20日
- ・横山雅彦、「超」入門！論理トレーニング、ちくま書房、2016年8月4日
- ・文部科学省、PISA読解力の向上に向けた対応策について、2015年
- ・文部科学省、OECD生徒の学習到達度調査（PISA2015）のポイント